

令和7年度伊賀地域高等学校活性化推進協議会のまとめ

令和7年12月

1 これまでの経緯

当地域では、平成16年度から協議会を設置し、県立高校のあり方について検討を進め、平成18年度には、伊賀市内の専門高校3校を統合した新総合専門高校（H21.4～伊賀白鳳高校）の設置をとりまとめ、平成27～33年度頃には当地域の県立高校は4校程度となることをイメージ化しました。

平成22年度～24年度までの検討の結果、名張桔梗丘高校と名張西高校を統合し、普通科ベースの新しい高校（H28.4～名張青峰高校）を設置することとしました。平成25・26年度は、当地域における中高一貫教育の実施について協議し、新たに中高一貫教育校を設置することは難しいと結論づけました。平成25～27年度には、特別な支援を必要とする子どもたちの受入れと支援について協議しました。平成27～29年度には、専門学科の学科・コース、総合学科の系列について協議を行い、アンケート調査結果のニーズをふまえ、建築・土木コースの設置を進めていくことを確認しました。（H31.4～伊賀白鳳高校に建築デザイン科を設置）

「令和元・2年度の協議のまとめ」（R3.3）では、当面の間、現在の5校を維持することが望ましいとしたうえで、今後中学校卒業生数がさらに減少することから、現在の5校の再編を含めて検討し、その結果を令和7年度頃までに明らかにする必要があるとしました。また、多様な学習ニーズにこたえる新しいタイプの学校の設置に関しては、どのようなニーズがあるかを的確にとらえるとともに、昼間定時制課程の併置を含めた定時制課程のあり方や、通信制課程の機能を取り入れた学習形態について検討する必要があるとしました。

令和4・5年度の協議会では、「県立高等学校活性化計画」（R4.3策定）に基づき、15年先までの中学校卒業生数の減少の状況等をふまえ、当地域の県立高校の学びと配置のあり方について協議を進め、「令和5年度の協議のまとめ」（R6.2）を策定しました。令和7～8年度に想定される学級減に対しては、検討の方向性に基づき5校の維持が望ましいとしました。また、令和10年度以降の学級減に対しては、現在の5校の再編を含めて検討し、その結果を令和7年度までに、とりまとめることとしました。

令和6・7年度の協議会では、「令和5年度のまとめ」や、地域の中学生・保護者へのアンケート結果などをふまえ、15年先の伊賀地域の県立高校の学びと配置のあり方を見据えながら、令和10年度に想定される当地域の県立高校の学級減への具体的な対応の方向性をとりまとめることとしました。

【参考】「県立高等学校活性化計画」（令和4年3月策定）抜粋

「これからの時代に求められる学びを提供できる県立高等学校のあり方」

- ・3学級以下の小規模校活性化の検証結果、15年先までの中学校卒業生の減少の状況等をふまえると、現行の高等学校の配置を継続していくのは難しい状況にある。このため、各地域の高等学校の学びと配置のあり方について検討を進め、その中で1学年3学級以下の高等学校は統合についての協議も行うこととする。これらについては、それぞれの地域の活性化協議会において具体的な内容を丁寧に協議することとし、協議が必要となる地域に協議会がない場合は同様の場を設けるものとする。
- ・こうした検討・協議は、統合という結論ありきで協議するのではなく、地域の実情に応じ丁寧に進めることとし、その際、状況に応じて、これまで取り組んできた、地域と連携した学びや学校独自の学びについての継承、交通が不便な地域における学びの機会の提供方策、分校化や校舎制への移行などについて協議することとする。

2 当地域の県立高校を取り巻く状況

(1) 伊賀地域の中学校卒業生数の推移と予測（含む社会増減）

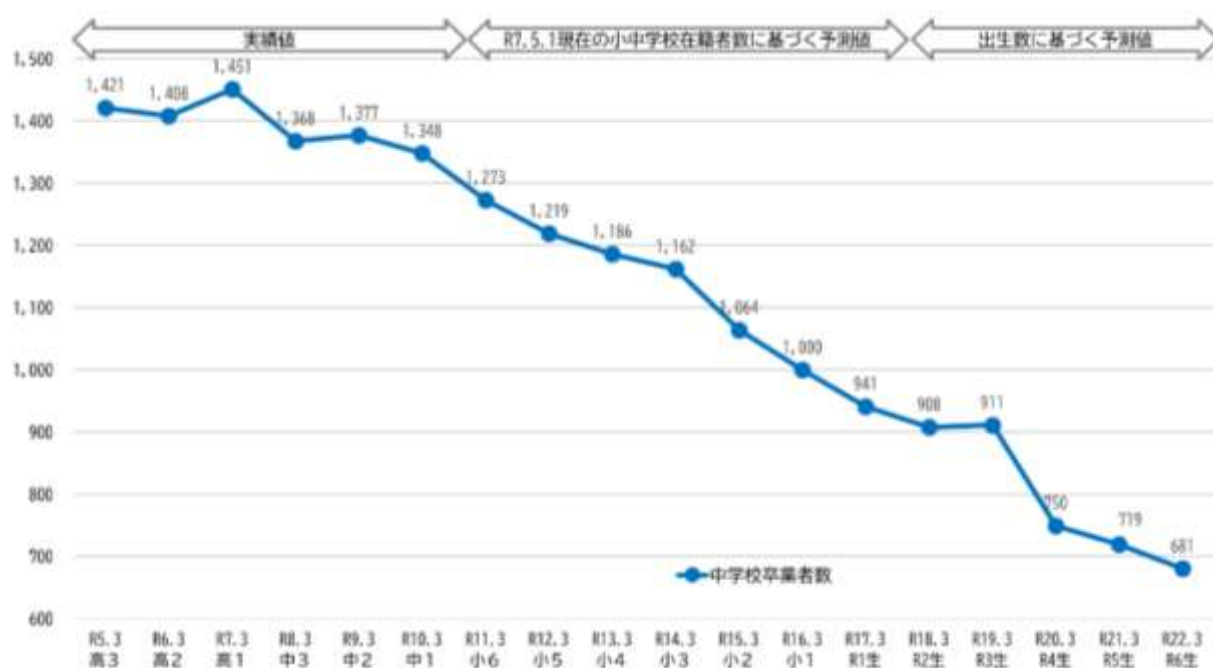
三重県の中学校卒業生数は、令和7年3月の15,718人から、令和16年3月には12,408人（令和7年3月比3,310人減）となるが見込まれており、引き続き減少が続きます。減少の度合いは地域によって異なりますが、当地域においては、以下の通り予測されています。

令和7年3月 1,451人

令和10年3月 1,348人（令和7年3月比103人〔7.1%〕減）

令和16年3月 1,000人（令和7年3月比451人〔31.1%〕減）

伊賀地域の中学校卒業生数の推移と予測（含む社会増減）



また、令和6年度の当地域の出生者数720人に基づいた令和22年3月の中学校卒業生数の予測値は681人（令和7年3月比770人〔53.1%〕減）になります。

なお、当地域においては、北部（伊賀市から旧青山町を除く）と南部（名張市に旧青山町を加える）別にも学級減が想定される年度末の中学校卒業生数の推移を以下の通り予測しています。

<伊賀北部> 令和7年3月 691人

令和8年3月 660人（令和7年3月比31人〔4.5%〕減）

令和10年3月 647人（令和7年3月比44人〔6.4%〕減）

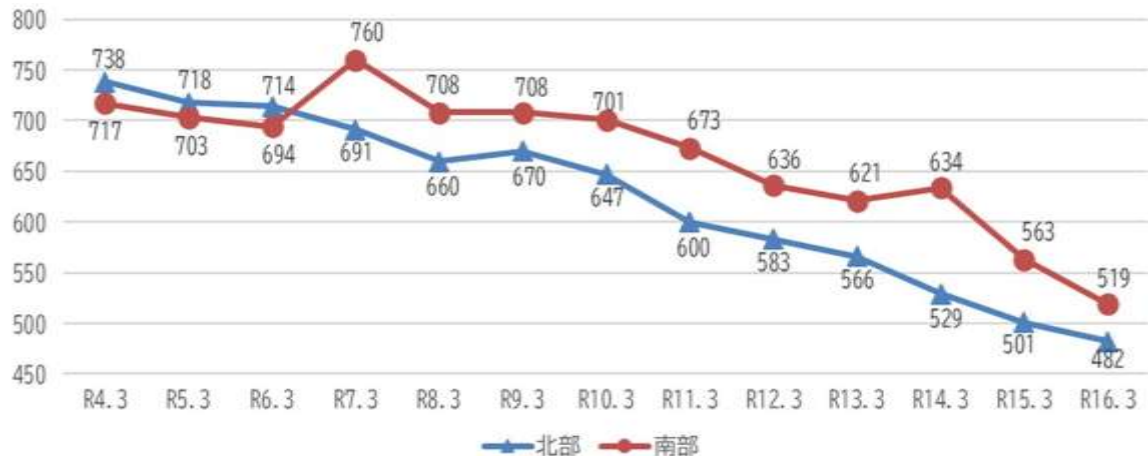
令和12年3月 583人（令和7年3月比108人〔15.6%〕減）

<伊賀南部> 令和7年3月 760人

令和8年3月 708人（令和7年3月比52人〔6.8%〕減）

令和11年3月 673人（令和7年3月比87人〔11.4%〕減）

伊賀地域の中学校卒業生数の推移と予測（含む社会増減）【北部南部別】



(2) 直近5年の公立高校の学校別第1学年学級数の推移

当地域の学校別学級数は、令和3年度に伊賀白鳳高校で前年度から1学級減したことにより、26学級となりました。また、令和5年度に上野高校で1学級減したことにより、25学級となり、令和7年度はその数を維持しています。

	R3	R4	R5	R6	R7
上野高校	7	7	6	6	6
あけぼの学園高校	2	2	2	2	2
伊賀白鳳高校	6	6	6	6	6
名張高校	5	5	5	5	5
名張青峰高校	6	6	6	6	6
合 計	26	26	25	25	25

※網掛けは前年度に対する学級増減

(3) 直近5年の公立高校の学科別第1学年学級数の推移

当地域の学科別学級数は、令和3年度に専門学科で1減（農業（▲5人）、工業（▲15人）、商業（▲10人）、福祉（▲5人）合わせて40人減）、令和5年度に普通科で1減し、地域で25学級となっています。

		R3	R4	R5	R6	R7
普通科※		13	13	12	12	12
専門学科	農業科	2(70)	2(70)	2(70)	2(70)	2(70)
	工業科	3(105)	3(105)	3(105)	3(105)	3(105)
	商業科	1(30)	1(30)	1(30)	1(30)	1(30)
	福祉科	1(35)	1(35)	1(35)	1(35)	1(35)
総合学科		7	7	7	7	7
合 計		26	26	25	25	25

※普通科は普通科系専門学科（理数科等）を含む

※学級数は1学級40人としているが、専門学科の()内の数値は人数を表す

(4) 伊賀地域の専門学科と総合学科の学び【令和7年度】

当地域の伊賀白鳳高校にある専門学科や、名張高校とあけぼの学園高校にある総合学科では、コースや系列など学びが細分化されており、そのいくつかについては学校間で共通する学びが多くあります。

	職業系専門学科	総合学科	
	伊賀白鳳	あけぼの学園	名張
デザイン	デザインコース（建築デザイン科）	－	美術（表現デザイン系列）
食 物	パティシエコース（フードシステム科）	製菓調理系列	－
商 業	経営科	情報教養系列	総合ビジネス系列
服 飾	－	美容服飾系列	ファッション（表現デザイン系列）
福 祉	介護福祉コース	健康福祉系列	健康スポーツ系列

(5) 伊賀地域の公立中学校卒業者の進路状況

例年、当地域の公立中学校卒業者は、伊賀地域の全日制県立高校へ約 70%が進学しています。一方、他地域の全日制県立高校と通信制高校へそれぞれ 10%弱、県内全日制私立高校と県外全日制高校、高等専門学校へそれぞれ 4%弱が進学しています。

令和7年3月の進路状況をみると、他地域の県立の全日制高校である津高校と津西高校への進学が 63 人、令和4年度に開校した私立の通信制高校である英心高等学校桔梗が丘校へ 53 人、私立の高等専門学校である近大高専へ 47 人、県外の定時制高校である山辺高校山添分校（奈良県）へ 8 人が進学しています。

<令和7年3月中学校卒業者の進路状況>

区分	地域内 県立 全日制	他地域 県立 全日制	県内 私立 全日制	県外 全日制	定時制	通信制	高専	特支	その他	計
人数	921 (67.1%)	133 (9.7%)	51 (3.7%)	51 (3.7%)	28 (2.0%)	107 (7.8%)	53 (3.9%)	17 (1.2%)	11 (0.8%)	1,372

(6) 通学に係る学校までの所要時間と月当たりの通学費の状況

通学費用については、伊賀市の「通学定期券および通学回数券購入費の半額助成」の支援や、三重交通の「特別割引年間通学定期券（通学フリー定期券 年間 165,600 円）」の仕組みがあります。当地域の主要駅から地域の5校への通学に係る所要時間と月当たりの通学費について、伊賀上野駅からは上野高校が時間的に近くて安く、名張青峰高校が時間的に遠くて高い状況です。名張駅からは名張高校が徒歩圏内であり、上野高校が時間的に遠く、あけぼの学園高校が高い状況です。

また、当地域から地域外である津地域や亀山地域の高校への通学費用は、地域内の高校に通うより安価となる場合もあります。

学校基本調査によると、通学時間については、当地域の県立高校全日制に通学している生徒の通学時間は、60 分以内が 87%、90 分以内が 97%となっており、概ね 90 分以内で通学できています。

<通学費用>

R7.5.1 学校基本調査より

費用	学校名	上野	あけぼの学園	伊賀白鳳	名張	名張青峰	合計	積み上げ
不要		313	39	445	187	141	1,125	1,125
		43.8%	18.4%	64.7%	32.4%	20.0%	38.8%	38.8%
3,000円以内		25	4	17	69	56	171	1,296
		3.5%	1.9%	2.5%	11.9%	8.0%	5.9%	44.7%
5,000円以内		47	8	17	113	94	279	1,575
		6.6%	3.8%	2.5%	19.6%	13.4%	9.6%	54.4%
7,000円以内		63	20	23	87	107	300	1,875
		8.8%	9.4%	3.3%	15.1%	15.2%	10.4%	64.7%
9,000円以内		61	31	59	29	63	243	2,118
		8.5%	14.6%	8.6%	5.0%	8.9%	8.4%	73.1%
11,000円以内		78	21	58	51	109	317	2,435
		10.9%	9.9%	8.4%	8.8%	15.5%	10.9%	84.1%
13,000円以内		54	26	31	21	53	185	2,620
		7.6%	12.3%	4.5%	3.6%	7.5%	6.4%	90.4%
15,000円以内		21	42	10	10	38	121	2,741
		2.9%	19.8%	1.5%	1.7%	5.4%	4.2%	94.6%
15,001円以上		53	21	28	11	43	156	2,897
		7.4%	9.9%	4.1%	1.9%	6.1%	5.4%	100.0%
合計		715	212	688	578	704	2,897	2,897

<通学時間>

R7.5.1 学校基本調査より

時間	学校名	上野	あけぼの学園	伊賀白鳳	名張	名張青峰	合計	積み上げ
15分以内		157	25	168	116	89	555	555
		22.0%	11.8%	24.4%	20.1%	12.6%	19.2%	19.2%
30分以内		224	25	255	189	172	865	1,420
		31.3%	11.8%	37.1%	32.7%	24.4%	29.9%	49.0%
45分以内		113	27	97	139	161	537	1,957
		15.8%	12.7%	14.1%	24.0%	22.9%	18.5%	67.6%
60分以内		163	65	104	92	150	574	2,531
		22.8%	30.7%	15.1%	15.9%	21.3%	19.8%	87.4%
90分以内		51	57	40	40	104	292	2,823
		7.1%	26.9%	5.8%	6.9%	14.8%	10.1%	97.4%
120分以内		5	13	18	1	25	62	2,885
		0.7%	6.1%	2.6%	0.2%	3.6%	2.1%	99.6%
121分以上		2	0	6	1	3	12	2,897
		0.3%	0.0%	0.9%	0.2%	0.4%	0.4%	100.0%
合計		715	212	688	578	704	2,897	2,897

(7) 高等学校の卒業者の進路状況

令和7年3月の全日制県立高校卒業者の進路状況は、上野高校は92.1%が4年制大学へ、あけぼの学園高校は67.7%が就職へ、伊賀白鳳高校は52.5%が就職へ、名張高校は39.9%が専修・各種学校等へ、名張青峰高校は73.4%が4年制大学へとなっています。

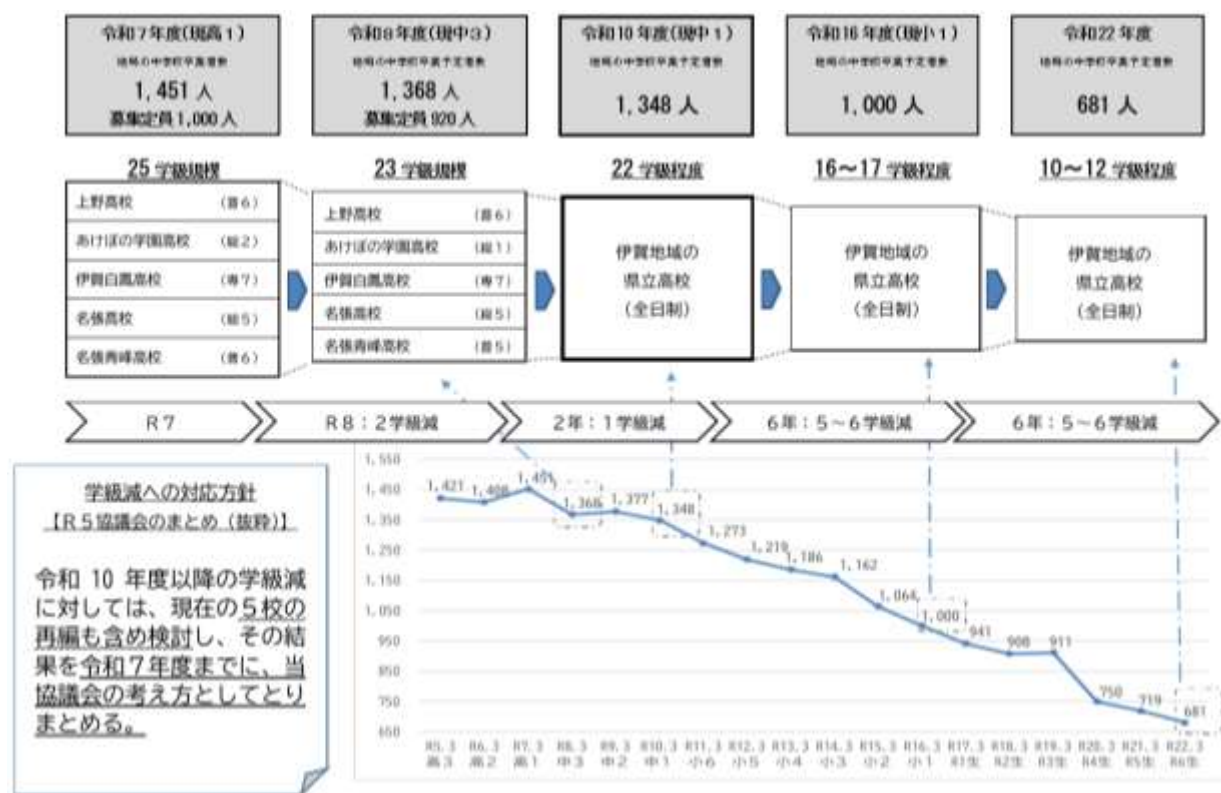
<令和7年3月伊賀地域の高校卒業者の進路状況>

区分	4年制大学	短期大学	専修・各種学校等	就職	その他	計
人数	516 (52.3%)	33 (3.3%)	189 (19.1%)	210 (21.3%)	39 (4.0%)	987

(8) 令和 22 年度までの伊賀地域の県立高等学校(全日制)の総学級数と当協議会の協議について

学級数の想定には、主に、中学校卒業生数の減少、全日制高校への進学率、県立高校と私立高校の定員の割合の3つの要素が働きます。これら3つの要素を、通信制高校への進学率が上昇し全日制高校への進学率が年々低下していることなど近年の傾向をもとにして、15 年先まで当てはめると、15 年先の令和 22 年度には、中学校卒業生数が約6割になるのに対し、1 学年あたりの総学級数は、それ以下の割合にまで減少することが見込まれます。

今後の当地域全体の県立高校（全日制）の総学級数については、令和 7 年度の 25 学級（1 学級 40 人として）から令和 8 年度は中学校卒業生数の減少をふまえ、2 学級減り、総学級数が 23 学級になります。令和 10 年度にはさらに 1 学級程度の減が見込まれ、22 学級程度になります。令和 10 年度から 16 年度までの6年間では、さらに5から6学級程度の減が見込まれ、総学級数は 16 から 17 学級程度となり、その後も中学校卒業生は減少が見込まれ、令和 22 年度の総学級数は 10 から 12 学級程度となることが想定されます。



3 令和6年度・令和7年度の協議内容と主な意見

(1) 令和6年度の協議会の概要

○ 第1回 令和6年8月8日(木)

当地域の県立高校の総学級数が現在の25学級規模から、令和5年度に生まれた子どもたちが高校へ入学する15年先には11~13学級規模となることが見込まれる中、当協議会がとりまとめた「令和5年度の協議のまとめ」(R6.2)をふまえ、令和10年度以降に想定される当地域の県立高校の学級減への対応の方向性について協議しました。

また、地域の中学生や保護者を対象としたアンケート調査の質問内容や実施方法等について検討しました。

○ 第2回 令和6年11月25日(月)

当協議会「令和5年度の協議のまとめ」や、地域の中学生・保護者へのアンケート結果をふまえ、15年先の伊賀地域の県立高校の学びと配置のあり方を見据えながら、令和10年度以降に想定される当地域の県立高校の学級減への具体的な対応の方向性について協議しました。

○ 第3回 令和7年2月17日(月)

これまでの協議をふまえ、15年先の伊賀地域の県立高校の学びと配置のあり方を見据えながら、令和10年度以降に想定される当地域の県立高校の学級減への具体的な対応の方向性について協議しました。

(2) 令和6年度の協議会の主な意見

(協議の進め方について)

- 「令和5年度のまとめ」までと同じ議論の繰り返しにならないよう、学びのあり方ではなく、統廃合を含めた具体的な配置のあり方について協議すべきだ。
- 学科・コースの選択肢や多様な子どもたちの受入れなど学校の機能面と、それらをどの場所で実現するかというハード面は分けて議論する必要がある。
- 令和10年度にどうするのかではなく、その先も見据えた方向性を議論すべきだ。先延ばしにするよりも、未来に向けて新しいものをつくるために早期に統合したほうがよい。
- 他地域でも、学級減に伴う系列やコースの縮小、部活動数の減少などにより、これまでできてきなくなっている現実がある。令和10年度以降の対応については、再編を視野に入れる必要がある。子どもたちのことを考えて、少しでも早く方向性を示すほうがよい。
- 一定規模を維持するために統合が必要であることは理解するが、単なる数合わせではなく、当地域にどのような高校が必要なのかを白紙の状態を考えていくべきである。
- 15年先には当地域の中学校卒業者数は半減し、県立高校は2校になることも想定しながら、令和10年度の学級減への対応についてとりまとめる必要がある。
- 一番大切なのはこれから高校生になる子どもたちに焦点をあてて考えることである。
- 高校に通うことがしんどい生徒、少人数なら何とか学校に来ることができている生徒など、子どもたちの個別の状況に応じていく視点も大切にして協議を進める必要がある。
- 当協議会におけるこれまでの協議をふまえて整理した「令和7年度のまとめに向けた方向性」に基づいて、学級減への具体的な対応案を事務局から示していただきたい。

(地域の県立高校の学びのあり方について)

- 多様な子どもたちの学びを保障するために、全日制と通信制の学びを組み合わせることができれば、子どもたちも通いやすくなり、地域から必要とされる学校となるのではないか。
- 毎日通わなくても3年で卒業できる私立通信制高校へ、公立高校より高い学費を負担してでも入学したいと思う生徒や保護者が増えている。当地域の私立通信制高校の状況と生徒の動向を注視しながら、多様なニーズに公立高校としてどう応えていくのかを考えることも重要ではないか。
- 学校規模ありきで議論を進めるのではなく、従来の教育方法を見直す視点と、小規模校における丁寧な学びを大規模校でどう実現するかについて、同時に考えていく必要がある。
- 職業系の高校においても多くの生徒が進学しており、専門と異なる分野に就職したり、将来転職したりする場合もあることから、基礎学力を定着させてくれる高校が多いほうがよい。
- 上野高校の学科改編で地域全体として他地域への流出率が減った。地域の高校の魅力を高め、地域の子どもたちが地域で学べるようにしていくことは大切である。
- 一定規模や多様な学びの選択肢を維持していくため、私立の高等専門学校や通信制高校が当地域にあることもふまえて、既存の枠組で考えるのではなく、新しい学科を作ることなども検討し、学びをどのように残していくかを考える必要がある。
- 増加傾向にある外国につながる子どもたちや不登校を経験した子どもたちなど、多様な子どもたちを受け入れられる機能を持った高校が当地域にあってほしい。
- 一定規模の高校の中で、多様な子どもたちの学びの保障や交通に係る課題について、どのように応えていくかを考えていくことが大切である。

(地域の県立高校の配置のあり方について)

- 不登校を経験した子どもたちにとって、あけぼの学園高校のような小規模校が果たす役割はとても大きく、統合されると県外への進学や就職を選択する中学生も増えるのではないか。単に生徒数が少ないから統合するのではなく、どうすれば小規模校を維持できるのかも考えてもらいたい。
- アンケート結果をふまえると、当地域には国公立大学等への進学をめざすクラスを設置した1学年6学級規模の普通科高校、学びの選択肢をそろえた専門学科と普通科が共存する高校、そして必要とする生徒がいる限り小規模校、これら3つのタイプの高校が必要と感じる。ただし、現在の場所ではなく、統合して交通の便のよい場所に新築したほうがよい。
- 北部と南部の行き来の便がよくないため、他地域への流出を防ぐためには、伊賀市と名張市に普通科を1校ずつ配置して、その中に専門学科や総合学科の学びを入れながら柔軟に対応していくのがよいのではないか。
- 時代によって必要な学びや機能などのソフト面は変化するが、校舎の新築や建替えなどのハード面は10年先を見据えた計画が必要となる。15年先の総学級数は分かっていることから、どの場所に集約するのかを早期に打ち出し、それに向かって考えていく必要がある。
- 当地域の中学校3年生の進路希望状況調査では、普通科の希望者数と専門学科・総合学科の希望者数が、概ね半分ずつとなっている。このことから、15年先には、普通科と職業学科を併せ持った総合高校を当地域に2校配置していくのではないか。

- 令和6年度の出生数を調べるとさらに減少することが分かっており、魅力ある学校とするために伊賀地域に大きな学校を1校設置することを考えていく必要があるかもしれない。

(学校規模について)

- 「令和5年度のまとめ」では、普通科における多様な学びの維持や大学進学に向けた指導の充実のためには、少なくとも1学年6学級はある方が望ましいとされている。一方、今回のアンケートでは、中学生の多くが2～3学級や4～6学級を希望していることから、こうした規模でも子どもたちが高校に期待する教育は実現できるのかについて改めて確認すべきである。
- アンケートのクロス集計から、中学生は現在在籍する中学校と同じような学級数を希望する傾向が見てとれるため、生徒の希望だけでなく、さまざまな視点から高校における望ましい学校規模を考えていく必要がある。
- アンケートでは、子どもたちは学校に対して、学びたい学科・コースがある、多様な学びの選択ができる、学校行事が充実している、部活動が活発であるといったことを望む回答が多く、これらを実現するためには一定の規模が必要である。総学級数が13学級であれば、この地域の高校は2～3校となるのは致し方ない。
- 高校の理科や地理歴史・公民科は、各科目に分かれて専門性を重視した学習を行っており、それぞれに専門性の高い教員を配置するためには、6学級以上の規模が必要である。
- 小規模校になると、理科において物理が開設できない、あるいは、物理を専門とする教員が生物や化学も指導するといったことが生じており、大学進学のニーズに応える専門性の高い学びの実現は難しくなる。
- 当地域の高校卒業者の進路状況をふまえると、総学級数が13学級であれば、大学進学のニーズに応えるための6学級規模の高校と、就職と専門学校などへの進学ニーズに応えるための7学級規模の高校の2校となるのではないかと。
- 15年先の学級数から考えると高校は2校となり、それをどのように配置するのかを、学びや機能と一緒に考えることが必要である。その際、どこかの高校に集約すると、既存の校風に合わせてしまうことになるので、新たな場所、校舎、制服で、全く新しい高校をつくってほしい。

(通学に係る課題について)

- 子どもたちが自力で高校に通うことが難しい地域の公共交通機関の充実について、何らかの働きかけができるとよい。
- 通学に関する課題を解決するためにバイク通学を認めるとともに、通学時の交通安全を確保するために、始業時間を遅らせたり、終業時間を早めたりしてはどうか。
- アンケートでは、通学のしやすさは高校を選ぶ際の重要な要素となっている。一方、国の調査結果では自宅から近いという理由で高校を選んだ生徒は入学後の満足度が低いことも考慮する必要がある。また、許容できる通学時間は60分以内とする回答が多いが、資料から当地域の5校は概ねその条件を満たしていると言える。

(3) 令和7年度の協議会の概要

○ 第1回 令和7年8月5日(火)

伊賀地域の県立高校の総学級数が、現在の25学級規模から、令和6年度に生まれた子どもたちが高校へ入学する15年先には10~12学級規模となることを見込まれる中、これまでの協議をふまえ、令和10年度以降に想定される当地域の県立高校の学級減への具体的な対応案について協議しました。

○ 第2回 令和7年9月22日(月)

これまでの協議をふまえ、15年先を見据えた令和10年度に想定される学級減への具体的な対応案と当協議会のまとめ案について協議しました。

○ 第3回 令和7年11月6日(木)

前回に引き続き、令和10年度に想定される学級減への具体的な対応等について協議を行い、令和10年度入学者選抜(令和9年度実施)からあけぼの学園高校の募集を停止し、県立高校5校を4校に再編することを含む当協議会の考え方をとりまとめました。

(4) 令和7年度の協議会の主な意見

(1学年あたり10~12学級となることが想定される15年先の学びと配置のイメージについて)

- 中学校卒業生数が大きく減少する中、単にどの施設を残すのかではなく、地域全体として子どもたちにどのような学びを提供するかを考えた上で配置の議論を進め、そこへ向かっていくことが大切である。通学距離の課題はお金で解決できる部分もある。
- 小中学校で不登校だったが、少人数のあけぼの学園高校に入学し、笑顔で卒業する子どもが増えているように思う。中学校卒業生数が減る現実を理解しているが、少人数の高校なら頑張ってみようという子どもたちのために、ぜひ小規模校を地域に残してもらいたい。
- 1学年1学級や2学級では教員数が少なく、多様な生徒への丁寧な対応は難しくなる。生徒の可能性を引き出すためにも、多様な選択科目の開設が可能であり、部活動や学校行事も充実する一定の学校規模があった方がよい。
- 地域の人口減少を食い止め、活性化につなげるためには、専門学科や総合学科を残したほうがよい。小規模校の教育も残してほしいが、教員数が限られる中で、5校存続は難しい。
- よりよい教育環境の提供には、教員数が重要な要素となる。小中学校と同様に県独自の予算での少人数学級導入も必要なのではないか。少しでも多くの教員が配置できるよう、県や国に対しての要望を粘り強く働きかけてもらいたい。
- 高校無償化が検討される中、多様な学びを当地域で保障するためには、近隣の市町や私学との兼ね合いも含め、地域全体で考えていく必要があるのではないかな。
- 将来的に、当地域に1校となった場合、多様な子どもたちを受け入れ、特色と魅力がなければ私学に生徒が流れてしまう。また、伊賀市が通学費用の支援を行っているように通学時間や費用は重要で、学校の配置場所によっても状況は変わってくる。
- アンケート結果から、子どもたちは、学びたい学科やコースがあること、部活動が活発で学校行事が盛り上がることを求めているとあり、一定の学校規模が必要であることが分かる。子ど

もたちを中心に考えれば、将来的に北部に1校、南部に1校を配置し、多様な子どもたちを受け入れる機能を持たせることで、当地域で求められる学びを提供できると考える。

- 北部と南部に1校ずつの配置なら、交通の便から伊賀白鳳高校と名張高校の立地がよい。また、子どもたちが希望する進路を実現するためには、進学と就職のバランスがとれた総合学科を設置するのが理想的である。定時制や通信制併設の理想の学校を2校設置できるのであれば、15年先と言わずそこをめざしてスタートを切ることができる。
- 進学や就職、多様な子どもたちの受け入れ、これらを全て網羅する高校が当地域に2校程度でできることが見えてきた。子どもたちにとって魅力ある学びを提供するため、統合なしには地域に高校が残っていかないように感じる。
- 当地域の高校に通いたいと思ってもらうためには、魅力ある教育内容に加え、学校施設も大切である。小中学校の建替えが進む一方で、県立高校の建替えは何十年と進んでいないため、ハード面でも思い切った施策がほしい。
- 学びの多様性の観点から小規模校の存続を考えたが、将来、地域に2校と想定すると普通科高校と総合専門高校の2校となるのではないか。子どもの視点からは8学級以上の規模にし、小規模校の機能は、定時制を含めどこかに入れる形になると感じた。
- 学びと配置のあり方を検討するにあたっては、生徒を中心に据えることをあらためて確認しておきたい。生徒のニーズや満足度を考えていかなければ、10年、15年先はうまくいかない。

(15年先を見据えた令和10年度に想定される1学級減への具体的な対応について)

- あけぼの学園高校の募集停止案については、これまでの学びがそこで途絶えてしまうのではないかという心配が大きい。当地域の高校で同様の学びを引き継いでいく必要がある。
- あけぼの学園高校に通いながら専門学校に通うことで、最短3年で美容師になれるのは大きな魅力であり、こうした機能は、どこかの学校に残してもらいたい。
- あけぼの学園高校の募集停止案が示されたが、美容の学びなどをどのように集約するのかという具体が示されていない。子どもたちや保護者の不安を払拭するためにも、総合学科や職業学科の学びをどのように整理していくのか、具体的に示す必要がある。
- 名張高校総合学科の表現デザイン系列ファッション専攻では、髪型やメイクについて探究しており、あけぼの学園高校の美容の学びとも親和性があることから、これらの学びを集約していくことも考えられる。ただし、美容の学びは一般的な教科・科目にない中で、専門的な指導ができる教員を持続的に確保していけるかなどの課題もある。
- 小規模校でないと高校に行けないという生徒にとって、あけぼの学園高校は大切な存在である。県立の使命として物理的に小規模校を設置する必要があるのではないか。
- あけぼの学園高校の募集停止案の公表を受け、進学を希望する子どもたちの保護者から「募集停止はショックだ」、「行く学校がない」との声を聞いた。また、在校生や卒業生にとっても不安があるようだ。少子化の現実を理解しているが、なんとか残してもらいたい。

- あけぼの学園高校が重要な役割を果たしていることは、全員が共通の認識を持っている。
令和 10 年度の学級減に向けては、小規模校の機能をどう提供するかを考える必要がある。
- 定時制課程には、不登校経験や外国にルーツのある生徒、学び直しをしたい生徒など、多様な背景を持つ生徒が在籍しており、少人数のため一人ひとりをしっかり見守ることができている。また、通信制課程との併修により 3 年で卒業することも可能であり、セーフティネットとしての役割を十分果たしている。
- 小中学校だけでなく、高校においても通級による指導が広がっている。多様な子どもたちの学びの保障や保護者の安心のためには、通級による指導が必要であると感じている。ぜひとも当地域で通級による指導を導入してもらいたい。
- 中学校段階では、将来就きたい職業が決まっておらず、高校で学んで選択肢を広げていきたいと考えている生徒が多い。また、不登校で学び直しを希望する生徒も多く、通信制高校がそのニーズに応えている。近隣府県や中勢地区、私立高校や高専も含めて、多様性に対応していく仕組みを考える必要がある。
- 地域の子どもたちが安心して学び、保護者、教員などの関係者が安心して育てられる教育環境をどう作っていくかが大切である。
- あけぼの学園高校の募集停止によって、同校が担ってきた多様な子どもたちの学びのセーフティネット機能がなくなると不安である。少人数による丁寧な指導や入試制度を含めた同校の機能を今後どのように保障していくのかについて、より具体的な記載が必要ではないか。
- 「学びを整理統合する」で終わるのではなく、整理統合することで 15 年後に向けて機能を地域に残し、よりよい形に変えていこうという表現にしたほうがよいのではないか。
- 「統合することで学びを充実させる」、「より特色化、魅力化を図る」など、学びを整理統合することで当地域の子どもたちにとってよい方向に進むといった前向きな表現にしたほうが、中学生や保護者の安心につながるのではないか。

(令和 8 年度以降の協議について)

- 15 年先に 2 校とするのであれば、現在の 5 校から 2 校となる過程をどのように進めるかが重要である。次期「県立高等学校活性化計画」において、どのような学びをめざし、どのような形で進めるのが今後の指針となると感じている。
- 子どもたちは未来の姿を早く知りたいと考えていると思う。まとめには、校舎の新築・建替えなど、広い意味で協議していくことを書き加えたほうがよい。
- 当地域では、県外の中高一貫校に一定数が進学している。中学校入学段階においても地域外への流出を防ぐという視点から、県立の中高一貫校について議論してもよいのではないか。
- 「今後の学びと配置のあり方(当協議会のまとめ)」について、誤解のないよう、できるだけ誰が見ても分かりやすい表現にした方がよい。
- 少子化が進む中であっても多様な子どもたちが伊賀地域の高校でしっかりと学べる環境をつくり、安心できるようにしてもらいたい。結論を出すまでに時間がないのもわかっているが、今後も地域の声を聴きながら丁寧な議論をお願いしたい。

- 1つの高校で専門性の高い教育と学びのセーフティネットの機能の双方を担うのは非常に難しいと思われるので、熊野青藍高校のように校舎制を採用し、機能を分散しつつ、部活動などは合同で行うといった方法も考えられるのではないかな。
- 校舎制は再編の過渡期の形としてはよいかもしれないが、中学校卒業生数が600人台となる15年先にも子どもたちのニーズに添えていくために、一定規模の学校が必要となることもふまえて議論していく必要がある。
- 塾が主催する高校説明会に当地域の県立高校も参加したが、小中学生は、校舎が綺麗で、多様な学びの選択肢があるところに興味関心が高く、そうした点で私立高校に魅力を感じている子どもたちも多いように感じた。地域で2校に再編していくのであれば、新しく魅力的な校舎や環境であることも大事になってくる。
- 校舎制の考え方を発展させて美容の学びを企業の中に置くことや、学校の機能の一つとして寮を併設していくことを検討するなど、新たな発想で協議を続けていくのもよいのではないかな。
- 県立高校の校舎の老朽化に関する資料があるが、新築・建替えの協議を進めるために、当地域の高校の状況を可能な範囲で提供してもらいたい。
- 募集停止となった高校の跡地を私立の通信制高校などが利用することになれば、協議会で検討している方向性に大きな影響が出るのではないかと心配している。
- 現在の委員構成で協議を進めていくことに限界を感じている。協議している方向性を実現させるためにも、今後は行政に関わる職員、まちづくりや建築に関する有識者などに委員として参画してもらいたい。
- 今後の配置のあり方について、考え方をとりまとめるとあるが、これまで多くの議論があった学校規模についても重要な視点として入れておいたほうがよいのではないかな。
- 今後も15年先を見据え、子どもたちのニーズや思いを大切に、よりよい方向性を考えていきたい。ただし、子どもたちだけで判断できないことについては、地域の力を結集して形にしていきたい。

4 今後の伊賀地域における県立高等学校の学びと配置のあり方について（当協議会のまとめ）

（1）学びと配置のあり方の方針

- 当地域の子どもたちに多様で豊かな学びを提供することを第一の価値観に据えて検討する。
- 少子化の中にあっても、当地域にどのような高校が必要なのか、未来に向けて前向きに発想する。
- 令和 10 年度以降の学級減への対応については、15 年先（令和 22 年度）を見据えて方向性を取りまとめる。
- 他地域へ進学する生徒が一定数あることから、地域の子どもたちが地域で学べるよう、普通科、専門学科、総合学科の学科・コース・系列など多様な学びの選択肢をできるだけ維持する。
- 大学進学ニーズに応える高校が地域に必要であり、多様な選択科目の開設や専門性の高い教員配置のためには、少なくとも 1 学年あたり 6 学級あることが望ましい。
- 部活動の活性化や学校行事の充実のためには、一定の学校規模があることが望ましい。
- 不登校を経験した子どもたち、外国につながる子どもたち、特別な支援を必要とする子どもたちなど、多様な子どもたちが安心して通える教育環境を実現する。
- 伊賀北部と南部に分けるだけでなく、隣接する地域の状況もふまえて伊賀地域全体で考える。
- 学びや機能などのソフト面と施設設備や立地などのハード面は分けて検討する。
- 通学方法や通学時間、交通費など通学に係る状況を考慮する。通学時間については、概ね 90 分以内、できれば 60 分以内となることが望ましい。
- 当地域の私立通信制高校の動向を注視しつつ、公立高校として多様なニーズにどのように応えていくのかを、全日制課程だけでなく定時制や通信制課程を含めて検討する。

（2）1 学年あたり 10～12 学級となることが想定される 15 年先（令和 22 年度）の学びと配置のイメージ

- 伊賀地域の高校の学びと配置のあり方は、北部と南部に分けるのではなく、地域全体で考える。
- 「学びと配置のあり方の方針」をふまえると、現在の 5 校は、大学進学ニーズに応える観点と多様な学びの選択肢を提供する観点を重視しながら 2 校へ集約される。
- 当地域内の通学環境を考慮すると、北部に 1 校、南部に 1 校を交通の便が良い場所に配置する。（新築・建替えも検討）

(3) 15 年先（令和 22 年度）を見据えた令和 10 年度に想定される 1 学級減への具体的対応

- 大学進学ニーズに応えるため、多様な選択科目の開設や専門性の高い教員配置ができる 1 学年あたり 6 学級の高校を、地域に 1 校は維持する。
- 専門性の高い学びを含む多様な学びの選択肢をできる限り維持しながら、専門学科や総合学科の系列における共通した学びの集約を図る。県内で唯一の「美容の学び」についても当地域の総合学科において維持させる。
- 学校行事、部活動など、子どもたちが協働的に活動できるよう、可能な限り一定の学校規模を維持する。
- 定時制のあり方や入試制度を含め、学びのセーフティネット機能※の充実を図り、不登校を経験した生徒、外国につながるのある生徒、特別な支援が必要な生徒など、多様な子どもたちがどの学校においても安心して学べる教育環境を整える。日本語の指導や「学び直しの機能」の充実については定時制を中心に進め、通級による指導については全日制への導入をめざす。
- こうしたことから、令和 10 年度入学者選抜（令和 9 年度実施）からあけぼの学園高校の募集を停止し、5 校を 4 校に再編することにより当地域の子どもたちの多様で豊かな学びを維持するとともに、当地域の県立高校の一層の特色化・魅力化を図る。

(4) 今後の協議について

- 当協議会では、他地域に先駆けて、当地域の高等学校の学びと配置のあり方についてとりまとめてきました。このことは、新しい専門学科の設置や普通科改革など、地域の高等学校の活性化の取組となり、未来を前向きにとらえた当地域における豊かな学びの実現につながっています。
- 中学校卒業生数の急速な減少が進む中、今後も当地域の子どもたちにとって「最善の教育環境を提供し続けること」を第一の価値観に据えて、「15 年先の学びと配置のイメージ」の実現に向けた協議を進める必要があります。
- そのため、次期県立高等学校活性化計画の策定に係る協議も注視しつつ、当地域の子どもたちにとって魅力ある高等学校の学びのあり方とそれを具現化する新築・建替えの議論を含めた配置や規模のあり方について、令和 9 年度を目途に当協議会において考え方をとりまとめる必要があります。

※ 一般的には、あらかじめ予測される危機に備え、被害を最小化するために設けられる制度や仕組みのことで、子どもたちの学びにおいては、経済的・時間的・地理的な制約等に関わらず、安全・安心で充実した教育機会にアクセスできる環境を整えること。（三重県教育ビジョン令和 6 年 3 月より）

【参考資料：令和7年度伊賀地域高等学校活性化推進協議会資料より抜粋】

○ 令和5年度の協議のまとめ（令和6年2月）抜粋

（2）伊賀地域の県立高等学校の学びと配置のあり方の検討の方向性

- 当協議会では、伊賀地域の子どもたちに、社会の変化が激しい中、これからの時代を生きていくため、自立する力と共生する力を育むことが重要であるとしてきました。また、子どもたちには、コミュニケーション能力や、情報を活用し伝える力を高めるとともに、地域社会への関心を持ち、自ら課題を見つけ協働し解決に向けて取り組み、失敗を恐れず挑戦できるよう育てほしいとしてきました。
- この5年間の伊賀地域の中学校卒業者の進路状況は、地域内の全日制県立高校への進学が減少傾向であり7割を切る状況となりました。一方、他地域の全日制高校へは、この2年やや減少したものの約1.5割が進学し、定時制、通信制、高専へは、この2年増加し、約1.5割が進学しています。特に、当地域の中学校卒業者の1割近くが津市内の全日制高校へ進学する状況が続いています。
- 一方、当地域においては、不登校傾向の子どもたち、特別な支援が必要な子どもたち、外国につながる子どもたちなどの多様な教育ニーズへの対応が必要な状況があります。公立の特別支援学校、夜間定時制に加え、近年、地域内に私立の通信制が開校し、当地域からも一定数が進学している状況です。
- こうしたことをふまえ、当協議会は、これからも続く少子化の中、地域の子どもたちができる限り当地域における学びを選択できるよう、学校個別ではなく伊賀地域全体を見通す視点を大切にして、伊賀地域の高等学校の学びと配置のあり方について協議を進めます。
- このことは、現在の当地域の中学校卒業生数の状況や、今後も少子化が継続して進行することをふまえ、これからの子どもたちのため、スケジュール感に注意して機を逸することなく協議を取りまとめしていくこととします。
- 協議にあたっては、これまで重ねてきた当協議会での議論や当地域の中学校卒業者の進路状況及びニーズをふまえ、次のことを基本として進めます。

1－1 専門学科のコースや総合学科の系列など多様な学びの選択肢の維持

－2 普通科の一定規模の維持

- なお、具体的な協議を進める際には、県立高等学校活性化計画に示された考え方に加え、次の視点も大切に、当地域の実情をふまえた丁寧な議論を行います。

2－1 少子化の中にあっても、消極的な方向ではなく未来に向けて前向きに発想すること

－2 北部と南部に分けることなく伊賀地域全体で考えること、また、状況によっては隣接する地域も含めて考える必要があること

－3 役割や機能が近い学校をできるだけ集約させ、スケールメリットを生かすこと

－4 学校の選択肢を維持できるよう、当面の間は5校を存続すること

－5 小規模校だからこそ通える生徒へ配慮すること

－6 通学方法や通学時間、必要となる交通費などの状況を考慮すること

- また、子どもたちの多様な教育ニーズへの対応その他については、次のとおり整理することとします。

3－1 定時制や通信制に係る多様な学びについては、当地域に新たに開校した私立通信制高校に対する生徒の動向を注視していくこと

－2 生徒の通学については、自治体の通学費の補助制度や各公共交通機関の取組について周知をしていくこと

（3）今後について（検討のスケジュール等）

- 当協議会はこれまで、他地域に先駆け、伊賀地域の高等学校の学びと配置のあり方をとりまとめてきました。このことは、県立高等学校の活性化の取組となり、急激な少子化の中にあっても未来を前向きにとらえた伊賀地域の学びの実現につながっています。
- こうした中、当地域では平成28年度に現在の5校配置となりましたが、少子化はさらに進行し、令和3年度の学級減では、伊賀白鳳高校において、地域における専門学科の学びの選択肢をできる限り維持するため、学級数はそのままにして定員のみを減じることとしました。（40人×7学級＝280人定員→35人×6学級＋30人×1学級＝240人定員）
- これにより伊賀白鳳高校は6学級規模の教員数で7学級を維持することから、学科内のコースの削減や教職員への負担増など、少なからず学びや学校運営への影響が生じています。

- このことから、当地域においては、現状の学びの選択肢を維持しながら、今後の学級減へ対応することが難しくなっています。
- 今後の当地域の中学校卒業生数は、令和5年3月卒と比較すると、令和8年3月卒は2学級程度の、令和10～14年3月卒は5年間継続して毎年1学級程度の定員減が見込まれ、合わせて7学級程度の学級減の可能性があります。
- 特に、伊賀北部では、令和5年3月卒と比較して、令和7～14年3月に段階的ではあるものの合わせて5学級程度の学級減の可能性があります。
- このことは、令和5年度現在、伊賀北部3校あわせて560人の定員が、令和14年度には360人（9学級）程度となることを意味し、今後の対応が非常に難しい状況です。
- こうしたことから、当協議会では、現在の学校の状況と少子化の進行をふまえ、伊賀地域の高等学校でこれから子どもたちに必要となる学びを実現するため、当地域の高等学校の学びと配置のあり方について、検討の方向性を基本として協議を進め、機を逸することなく意見を取りまとめていくことが必要です。協議にあたっては、中学生やその保護者を対象としたアンケートを実施し、その結果もふまえて検討することとします。
- 多様な教育ニーズに応じた学びの検討については、引き続き、令和4年度に開校した私立通信制の状況と生徒の動向に注視していくこととします。
- なお、これまでの協議をふまえ、令和7～8年度に想定される学級減に対しては、検討の方向性に基づき5校の維持が望ましいと考えます。また、令和10年度以降の学級減に対しては、現在の5校の再編を含めて検討し、その結果を令和7年度までに、当協議会の考え方としてとりまとめます。

○ 伊賀地域の中学校卒業生数の推移と予測（含む社会増減）【市別】

令和7年5月1日 教育政策課調べ

中学校卒業年月		R 4.3	R 5.3	R 6.3	R 7.3	R 8.3	R 9.3	R 10.3	R 11.3	R 12.3	R 13.3	R 14.3	R 15.3	R 16.3
		卒業	卒業	卒業	卒業	現中3	現中2	現中1	現小6	現小5	現小4	現小3	現小2	現小1
伊賀市	卒業生数	801	779	768	771	724	735	709	661	636	620	584	558	519
	前年度対比		-22	-11	3	-47	11	-26	-48	-25	-16	-36	-26	-39
	R7.3対比					-47	-36	-62	-110	-135	-151	-187	-213	-252
	①公立小中在籍者数	(739)	(720)	(710)	(692)	661	683	654	658	631	615	577	553	519
	②私立小中在籍者数	(62)	(59)	(58)	(79)	52	37	35						
名張市	卒業生数	654	642	640	680	644	642	639	612	583	566	578	506	481
	前年度対比		-12	-2	40	-36	-2	-3	-27	-29	-17	12	-72	-25
	R7.3対比					-36	-38	-41	-68	-97	-114	-102	-174	-199
	③公立小中在籍者数					642	642	637	643	611	595	605	533	506
伊賀地域計	卒業生数	1,455	1,421	1,408	1,451	1,368	1,377	1,348	1,273	1,219	1,186	1,162	1,064	1,000
	前年度対比		-34	-13	43	-83	9	-29	-75	-54	-33	-24	-98	-64
	R7.3対比					-83	-74	-103	-178	-232	-265	-289	-387	-451
	①②③小中在籍者数					1,355	1,362	1,326	1,301	1,242	1,210	1,182	1,086	1,025
伊賀地域県立高校の1学年学級数 ()内は入学定員の計		27 (1,040)	26 (1,000)	26 (1,000)	26 (1,000)	24 (920)								
(参考)														
		R 4.3	R 5.3	R 6.3	R 7.3	R 8.3	R 9.3	R 10.3	R 11.3	R 12.3	R 13.3	R 14.3	R 15.3	R 16.3
		卒業	卒業	卒業	卒業	現中3	現中2	現中1	現小6	現小5	現小4	現小3	現小2	現小1
県内合計	卒業生数	16,244	16,055	15,891	15,718	15,517	15,261	14,807	14,345	14,044	14,030	13,399	12,753	12,408
	前年度対比		-189	-164	-173	-201	-256	-454	-462	-301	-14	-631	-646	-345
	R7.3対比				0	-201	-457	-911	-1,373	-1,674	-1,688	-2,319	-2,965	-3,310
	小中在籍者数					15,489	15,238	14,788	14,463	14,153	14,149	13,506	12,861	12,524

卒業生数の算出過程における端数の関係により、市別で算出した卒業生数と北部南部別で算出した卒業生数が異なっている年があります。

○ 伊賀地域の中学校卒業生数の推移と予測（含む社会増減）【北部・南部別】

令和7年5月1日 教育政策課調べ

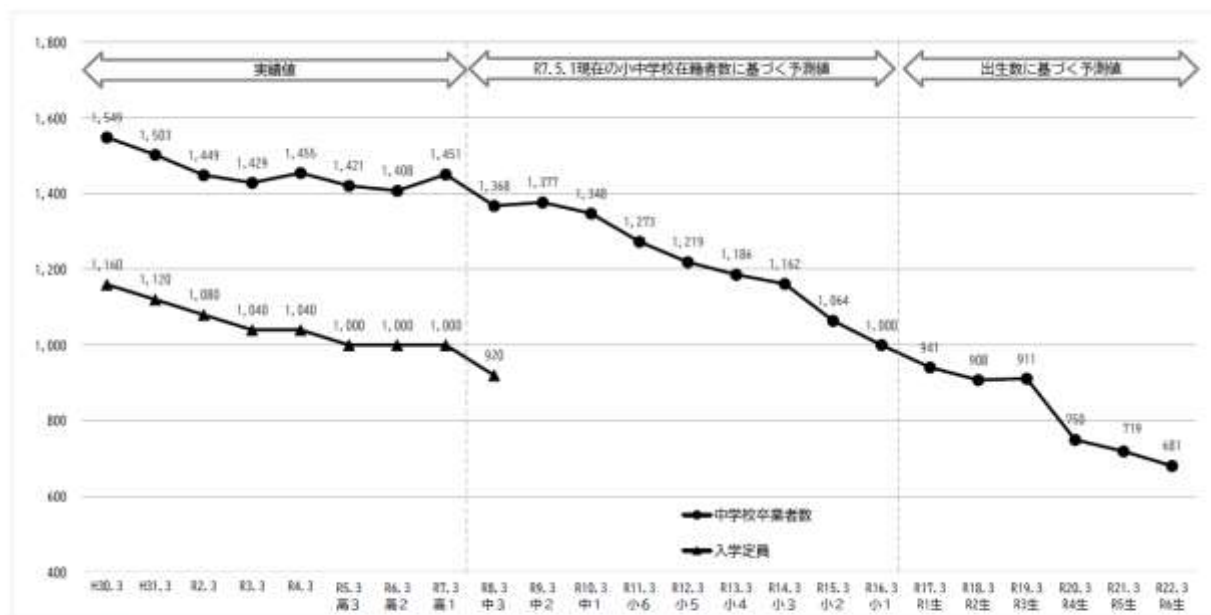
中学校卒業年月		R 4.3	R 5.3	R 6.3	R 7.3	R 8.3	R 9.3	R 10.3	R 11.3	R 12.3	R 13.3	R 14.3	R 15.3	R 16.3
		卒業	卒業	卒業	卒業	現中3	現中2	現中1	現小6	現小5	現小4	現小3	現小2	現小1
伊賀北部	卒業生数	738	718	714	691	660	670	647	600	583	566	529	501	482
	前年度対比		-20	-4	-23	-31	10	-23	-47	-17	-17	-37	-28	-19
	R7.3対比					-31	-21	-44	-91	-108	-125	-162	-190	-209
	①公立小中在籍者数	(676)	(659)	(656)	(612)	597	618	593	594	577	559	520	496	479
伊賀南部	卒業生数	717	703	694	760	708	708	701	673	636	621	634	563	519
	前年度対比		-14	-9	66	-52	0	-7	-28	-37	-15	13	-71	-44
	R7.3対比					-52	-52	-59	-87	-124	-139	-126	-197	-241
	③公立小中在籍者数					706	707	700	707	665	651	662	590	546
伊賀地域計	卒業生数	1,455	1,421	1,408	1,451	1,368	1,378	1,348	1,273	1,219	1,187	1,163	1,064	1,001
	前年度対比		-34	-13	43	-83	10	-30	-75	-54	-32	-24	-99	-63
	R7.3対比				0	-83	-73	-103	-178	-232	-264	-288	-387	-450
	①②③小中在籍者数					1,355	1,362	1,328	1,301	1,242	1,210	1,182	1,086	1,025
伊賀地域県立高校の1学年学級数 ()内は入学定員の計		27 (1,040)	26 (1,000)	26 (1,000)	26 (1,000)	24 (920)								

※ 伊賀北部＝伊賀市から旧青山町を除く。
※ 伊賀南部＝名張市に旧青山町を加える。

(参考)

		R 4.3	R 5.3	R 6.3	R 7.3	R 8.3	R 9.3	R 10.3	R 11.3	R 12.3	R 13.3	R 14.3	R 15.3	R 16.3
		卒業	卒業	卒業	卒業	現中3	現中2	現中1	現小6	現小5	現小4	現小3	現小2	現小1
県内合計	卒業生数	16,244	16,055	15,891	15,718	15,517	15,261	14,807	14,345	14,044	14,030	13,399	12,753	12,408
	前年度対比		-189	-164	-173	-201	-256	-454	-462	-301	-14	-631	-646	-345
	R7.3対比				0	-201	-457	-911	-1,373	-1,674	-1,688	-2,319	-2,965	-3,310
	小中在籍者数					15,489	15,238	14,788	14,463	14,153	14,149	13,506	12,861	12,524

○ 伊賀地域の中学校卒業生数と県立高等学校入学定員（全日制）の推移



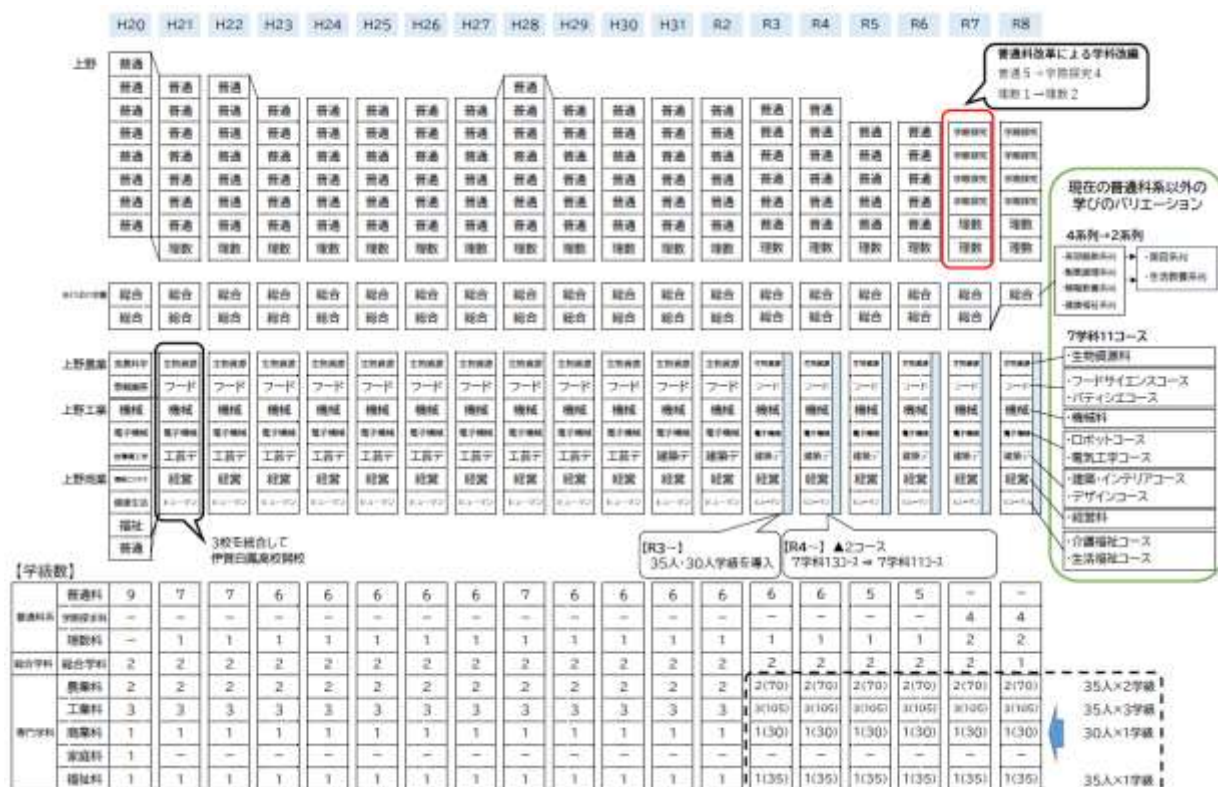
【伊賀地域の出生数】

	H28年度生 現小3	H29年度生 現小2	H30年度生 現小1	R元年度生 5～6歳	R2年度生 4～5歳	R3年度生 3～4歳	R4年度生 2～3歳	R5年度生 1～2歳	R6年度生 0～1歳
伊賀市	643	582	569	533	534	527	434	419	391
名張市	584	522	509	462	427	437	359	342	329
合計	1,227	1,104	1,078	995	961	964	793	761	720

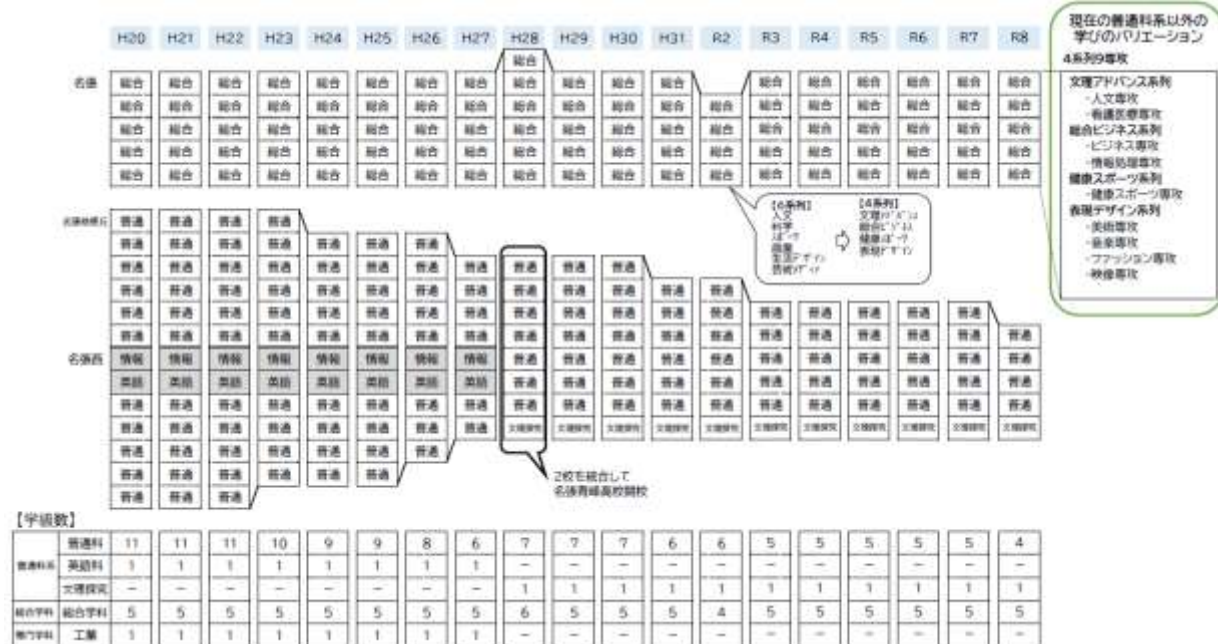
○ 伊賀地域公立中学校卒業者の進路状況(北部・南部)【令和7年3月卒】

区分	進路先	伊賀北部		伊賀南部		伊賀地域合計	
		人数	割合(%)	人数	割合(%)	人数	割合(%)
伊賀地域 県立 全日制	上野	147	24.0	85	11.2	232	16.9
	伊賀白鳳	170	27.8	52	6.8	222	16.2
	あけぼの学園	26	4.2	26	3.4	52	3.8
	名張	37	6.0	147	19.3	184	13.4
	名張青峰	69	11.3	162	21.3	231	16.8
	小計	449	73.4	472	62.1	921	67.1
他地域 県立 全日制	津	6	1.0	33	4.3	39	2.8
	津西	3	0.5	21	2.8	24	1.7
	上記以外	21	3.4	49	6.4	70	5.1
	小計	30	4.9	103	13.6	133	9.7
県内 私立 全日制	鈴鹿	7	1.1	0	0.0	7	0.5
	高田	15	2.5	4	0.5	19	1.4
	三重	1	0.2	7	0.9	8	0.6
	桜丘	2	0.3	2	0.3	4	0.3
	上記以外	7	1.1	6	0.8	13	0.9
	小計	32	5.2	19	2.5	51	3.7
県外 全日制	国公立	4	0.7	1	0.1	5	0.4
	私立	15	2.5	31	4.1	46	3.4
	小計	19	3.1	32	4.2	51	3.7
定時制	上野	8	1.3	0	0.0	8	0.6
	名張	1	0.2	10	1.3	11	0.8
	上記以外の県内	0	0.0	0	0.0	0	0.0
	山辺高校山添分校	3	0.5	5	0.7	8	0.6
	上記以外の県外	0	0.0	1	0.1	1	0.1
	小計	12	2.0	16	2.1	28	2.0
通信制	県立（北星・松阪）	0	0.0	1	0.1	1	0.1
	英心桔梗が丘校	23	3.8	30	3.9	53	3.9
	英心伊勢本校	0	0.0	5	0.7	5	0.4
	徳風	2	0.3	0	0.0	2	0.1
	上記以外の県内	0	0.0	2	0.3	2	0.1
	県外	15	2.5	29	3.8	44	3.2
	小計	40	6.5	67	8.8	107	7.8
高等専門 学校	鈴鹿高専	2	0.3	0	0.0	2	0.1
	鳥羽商船	0	0.0	0	0.0	0	0.0
	近大高専	11	1.8	36	4.7	47	3.4
	県外	0	0.0	4	0.5	4	0.3
	小計	13	2.1	40	5.3	53	3.9
特別支援 学校	伊賀つばき学園	8	1.3	9	1.2	17	1.2
	上記以外の県内	0	0.0	0	0.0	0	0.0
	県外	0	0.0	0	0.0	0	0.0
	小計	8	1.3	9	1.2	17	1.2
その他	専修・各種・職訓	1	0.2	0	0.0	1	0.1
	就職	2	0.3	0	0.0	2	0.1
	上記以外	6	1.0	2	0.3	8	0.6
	小計	9	1.5	2	0.3	11	0.8
公立中学校卒業生数		612	100.0	760	100.0	1,372	100.0

○ 全日制高等学校の設置学科と学級数の推移（伊賀市）



○ 全日制高等学校の設置学科と学級数の推移（名張市）



○ 伊賀地域の県立高等学校等の学科とコースについて(令和 8 年度入学生)

				学校名	大学科	募集定員 (R8)								
							1	2	3	4	5	6		
伊賀地域全日制課程	県立	上野高校	普通科	240	920	学際探究科		学際探究科	学際探究科	学際探究科	理数科	理数科		
	県立	あけぼの学園高校	総合学科	40		美容系列 生活教養系列		2 系列/40人		7 学科11コース/240人		4 系列 9 専攻/200人		
	県立	伊賀白鳳高校	専門学科	240		機械科 (35) ・機械科	電子機械科 (35) ・ロボット ・電気工学	建築デザイン科 (35) ・建築・インテリア ・デザイン	生物資源科 (35) ・生物資源科	フードシステム科 (35) ・フードサイエンス ・バティエ	経営科 (30) ・経営科	ヒューマンサービス科 (30) ・介護福祉 ・生活福祉		
	県立	名張高校	総合学科	200		文理アドバンス系列 ・人文専攻 ・看護医療専攻		総合ビジネス系列 ・ビジネス専攻 ・情報処理専攻		健康スポーツ系列 ・健康スポーツ専攻		表現デザイン系列 ・美術専攻 ・音楽専攻 ・ファッション専攻 ・映像専攻		普通科系/440人
	県立	名張青峰高校	普通科	200		普通科	普通科	普通科	普通科	普通科 【文理探究コース】				
	私立	桜丘高校	普通科	155	155	普通科 (155)								

○全日制

※ 私立 愛農学園農業高校

25 人

農業科

☆大学科の「普通科」には、普通系専門学科（理数科等）を含む

○定時制課程

県立 上野高校

40 人

普通科

県立 名張高校

40 人

普通科

○通信制課程

私立 英心高校桔梗が丘校

60 人

普通科：探究コース、集中スクーリングコース（R8～）

※ 私立 神村学園高等部伊賀

50 人

普通科：選択登校型、全日型（両型合わせた年間募集定員）

○高等専門学校

私立 近畿大学工業高等専門学校

160 人

機械システム、電気電子、制御情報、都市環境（3年次よりコース選択）

（※県外扱い）

○ 伊賀地域の県立高等学校(全日制)の卒業生と進路状況

【令和 7 年 3 月卒】

学校名	学科	四年制大学	短大	専門学校等	就職	その他	卒業者数
上野	普通科 理数科	255	2	9	0	11	277
		92.1%	0.7%	3.2%	0.0%	4.0%	100.0%
あけぼの学園	総合学科	3	0	10	44	8	65
		4.6%	0.0%	15.4%	67.7%	12.3%	100.0%
伊賀白鳳	機械科、電子機械科、 建築デザイン科、生物資源科、 フードシステム科、経営科、 ヒューマンサービス科	35	16	55	117	0	223
		15.7%	7.2%	24.7%	52.5%	0.0%	100.0%
名張	総合学科	55	11	77	42	8	193
		28.5%	5.7%	39.9%	21.8%	4.1%	100.0%
名張青峰	普通科 普通科（文理探究コース）	168	4	38	7	12	229
		73.4%	1.7%	16.6%	3.1%	5.2%	100.0%

普通科計 （普通科系専門学科を含む）	423	6	47	7	23	506
	83.6%	1.2%	9.3%	1.4%	4.5%	100.0%
専門学科計	35	16	55	117	0	223
	15.7%	7.2%	24.7%	52.5%	0.0%	100.0%
総合学科計	58	11	87	86	16	258
	33.1%	4.3%	33.7%	33.3%	6.2%	100.0%
合計	516	33	189	210	39	987
	52.3%	3.3%	19.1%	21.3%	4.0%	100.0%

○ 伊賀地域の県立高校に関するアンケート結果について

1 生徒を対象としたアンケート結果

(1) 高校選びで重視すること（問6）

「通学のしやすさ・距離」（49.8%）、「学校の雰囲気・イメージ」（48.0%）に続いて、「文化祭や体育祭などの学校行事が充実している」（46.0%）、「学びたい学科やコースがある」（42.7%）、「入りたい部活動がある、部活動が活発に行われている」（35.3%）の順となっている。

(2) 高校に期待する教育（問8）

高等学校には、「自ら学び続ける力が身につく教育」（54.0%）、「基本的な知識が身につく教育」（46.2%）をはじめ、「社会人として必要なマナーや礼儀・責任感が身につく教育」（44.2%）、「社会性や協調性、コミュニケーション能力など協働する力が身につく教育」（43.2%）を期待している。

(3) 希望する学級数について（問10）

多い順に「2～3学級」（41.8%）、「4～6学級」（37.7%）、「1学級」（16.7%）、続いて「7学級以上」（3.9%）となっている。

(4) 通学時間について（問11）

多い順に「60分以内まで」（43.4%）、「30分以内まで」（29.3%）、「90分以内まで」（19.1%）、「120分以内まで」（5.0%）、「121分以上」（3.2%）となっている。

(5) 将来生活する場所について（問12）

「まだ決まっていない、わからない」（39.9%）が最も多く、続いて、「県外」（26.8%）、「一度は地元を離れても、いつかは戻りたい」（13.0%）、「地元（現在住んでいる市町）」（9.6%）となっている。

2 保護者を対象としたアンケート結果

(1) 高校選びで重視すること（問6）

「学びたい学科やコースがあること」（71.2%）に続いて、「通学のしやすさ・距離」（68.1%）、「自分の興味関心に応じて多様な学びが選択できること」（63.3%）に続いて、「確かな学力を身につける授業が充実していること」（42.8%）となっている。

(2) 高校に期待する教育（問8）

「自ら学び続ける力が身につく教育」（59.5%）をはじめ、「社会性や協調性、コミュニケーション能力など協働する力が身につく教育」（58.8%）、「多様な選択肢の中から進路を決定する力が身につく教育」（52.9%）、「自分で問いや課題を見つけ、主体的に取り組む力が身につく教育」（51.8%）を期待している。

(3) 学級の規模について（問10）

多い順に「4～6学級」（51.7%）、「2～3学級」（32.5%）、「1学級」（11.7%）、続いて「7学級以上」（4.1%）となっている。

(4) 通学時間について（問11）

多い順に「60分以内まで」（59.4%）、「30分以内まで」（25.3%）、「90分以内まで」（12.8%）、「120分以内まで」（2.3%）、「121分以上」（0.3%）となっている。

(5) 将来生活する場所について（問12）

「本人の希望次第」（67.0%）が最も多く、続いて、「地元」（8.7%）、「特に考えはない」（8.3%）、「県外」と「一度は地元を離れても、いつかは戻ってほしい」（6.1%）となっている。

(6) 今後の伊賀地域の県立高校のあり方について（問13）

今後の伊賀地域の高校については、「一定の統合は避けられない」（61.6%）が最も多く、続いて「統合は避けるべき」（33.6%）、「積極的に統合を進めるべき」（4.8%）となっている。

○ 学級規模と教育環境

1 教員数

(1) 教職員定数

各学校に配置される教職員定数の標準は、法律により、入学定員（≡学級数）に応じて定められています。

全日制普通科の場合

1 学年 あたりの 学級数	1 学級	2 学級	3 学級	4 学級	5 学級	6 学級	7 学級	8 学級
教員数 (人)	8	15	23	29	35	43	48	52
差		7	8	6	6	8	5	4

※ 校長、教頭、養護教諭、実習助手、事務職員を除く

※ 上記以外に学科による加算や加配教員、非常勤講師等の配置があります

※ あくまで標準であり、すべての学校がこの人数に一致するわけではありません

(2) 学級数別の各教科担当教員の配置シミュレーション（全日制普通科）

1 学年 あたりの 学級数	1 学級	2 学級	3 学級	4 学級	5 学級	6 学級	7 学級	8 学級
計	8	15	23	29	35	43	48	52
国語	1	2	4	5	5	7	7	8
数学	2	3	4	5	6	7	8	9
英語	2	3	4	5	6	7	8	9
社会	1	2	3	4	5	6	6	7
理科	1	2	3	4	5	6	7	8
保体	1	2	3	3	4	5	6	6
芸術	0	1	1	1	2	3	3	3
家庭	0	0	1	1	1	1	1	1
情報	0	0	0	1	1	1	1	1

※ 1～7 学級の教科別教員数については、県内の 8 学級の高校の教科別教員数を参考に算出

※ 国語・数学・英語は学年あたりの配置人数が 1、2、3 人で色分け

※ 社会は地歴科と公民科から構成しており、地歴科では日本史、世界史、地理を専門とする教員を 5 人、公民科では 1 人を配置できる 6 人と、地歴 3 人、公民 1 人を配置できる 4 人で色分け

※ 理科は物理、化学、生物を専門とする教員が 2 人ずつ配置できる 6 人と、1 人ずつの 3 人で色分け

※ 保健体育は学年あたりの人数が 2 人、1 人で色分け

※ 芸術は音楽、美術、書道の教員が 1 人ずつ配置できる 3 人で色分け

※ この表はシミュレーションであり、実際は学校ごとに教育課程などが異なるため、教員数の合計、教科別の人数ともこのとおりとは限りません。

2 部活動

R4学校規模別部活動設置状況（男子）マネージャー含む

第1学年学級数					1	2	3	4	5	6	7	8
学校数					2	7	2	9	12	7	8	7
No	競技・種目	設置 学校数	設置 割合	登録 人数								
1	硬式野球	53	98.1%	1,393	2	7	2	8	12	7	8	7
2	バスケットボール	47	87.0%	918	1	6	2	8	10	5	8	7
3	陸上競技	46	85.2%	824	2	4	2	7	10	6	8	7
4	卓球	42	77.8%	682	1	4	2	5	10	5	8	7
5	バドミントン	41	75.9%	1,130	0	6	0	6	11	4	7	7
6	サッカー	39	72.2%	1,515	0	2	2	5	10	5	8	7
7	テニス	34	63.0%	513	0	2	2	4	8	4	8	6
8	バレーボール	33	61.1%	627	1	2	0	5	7	4	7	7
9	ソフトテニス	31	57.4%	518	1	4	0	6	5	4	5	6
10	剣道	27	50.0%	177	0	0	1	4	5	5	5	7
11	ハンドボール	20	37.0%	472	0	0	0	1	4	4	5	6
12	柔道	20	37.0%	146	1	1	0	2	8	1	3	4
13	弓道	19	35.2%	348	0	0	1	4	5	3	5	1
14	山岳（ワグ・フォード）	12	22.2%	148	0	0	0	2	1	2	3	4
15	ラグビー	10	18.5%	207	0	0	0	1	3	1	2	3
16	水泳	10	18.5%	87	0	0	0	3	1	0	2	4
17	ダンス	9	16.7%	39	0	0	0	0	4	1	2	2
18	レスリング	7	13.0%	53	0	1	0	1	4	0	1	0
19	軟式野球	6	11.1%	104	0	0	0	0	1	1	2	2
20												
設置部活動の種類（～No.19）					7	11	8	18	19	17	19	18
設置部活動の全種類					7	15	9	22	28	23	26	22

R4学校規模別部活動設置状況（女子）マネージャー含む

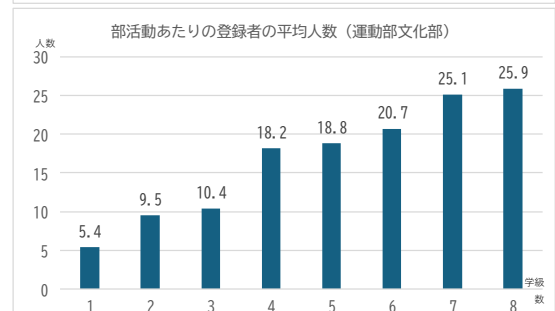
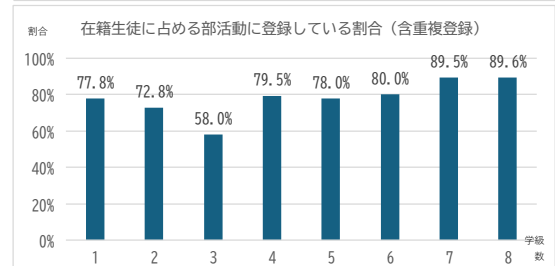
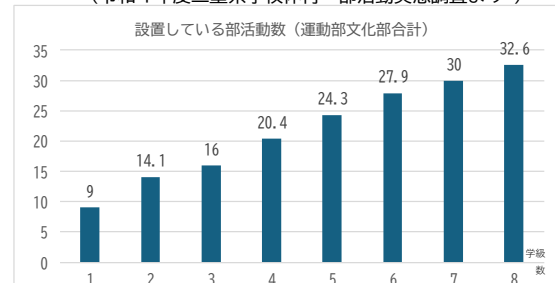
第1学年学級数					1	2	3	4	5	6	7
学校数					2	7	2	9	12	7	8
No	競技・種目	設置 学校数	設置 割合	登録 人数							
1	陸上競技	41	75.9%	486	1	3	1	6	9	6	8
2	バドミントン	39	72.2%	913	0	5	0	7	10	4	6
3	バスケットボール	39	72.2%	575	2	2	0	5	10	6	7
4	卓球	37	68.5%	334	0	1	2	5	8	6	8
5	バレーボール	34	63.0%	533	1	1	0	5	7	6	7
6	テニス	29	53.7%	316	0	1	1	3	5	6	7
7	ソフトテニス	28	51.9%	279	1	3	0	5	5	5	4
8	剣道	25	46.3%	135	0	0	1	2	4	5	6
9	弓道	17	31.5%	334	0	0	1	3	5	2	5
10	ハンドボール	15	27.8%	255	0	0	0	0	3	3	4
11	ダンス	12	22.2%	403	0	0	0	0	5	1	3
12	ソフトボール	12	22.2%	188	0	0	0	2	3	3	2
13	柔道	12	22.2%	38	0	0	0	1	4	2	1
14	水泳	10	18.5%	54	0	0	0	3	0	1	2
15	硬式野球	9	16.7%	24	0	1	0	1	3	3	0
16	サッカー	7	13.0%	93	0	1	0	0	2	0	1
17	体操	5	9.3%	66	0	0	0	1	1	0	1
18	空手道	5	9.3%	57	0	0	0	0	0	1	2
19	山岳（ワグ・フォード）	5	9.3%	31	0	0	0	1	1	0	0
20											
設置部活動の種類（～No.19）					4	9	5	15	17	16	17
設置部活動の全種類					4	11	6	17	25	21	25

R4学校規模別部活動設置状況（文化部）

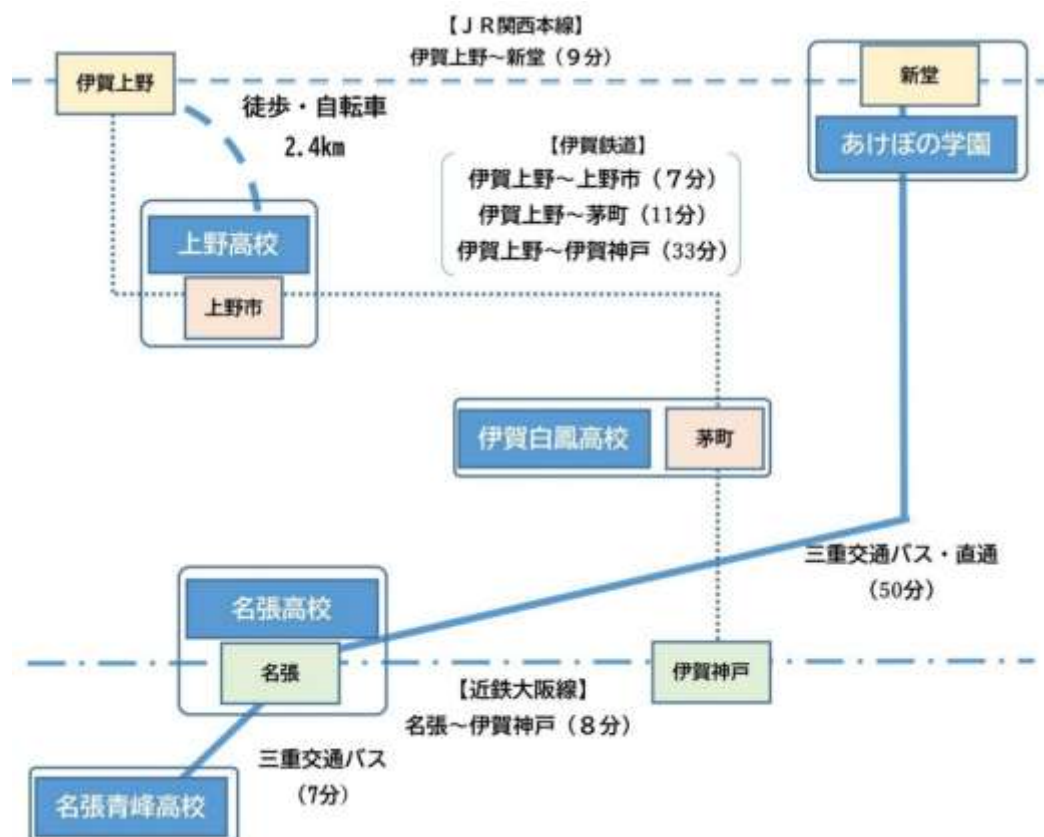
第1学年学級数					1	2	3	4	5	6	7	8
学校数					2	7	2	9	12	7	8	7
No	競技・種目	設置 学校数	設置 割合	登録 人数								
1	美術	47	87.0%	634	0	5	2	8	10	7	8	7
2	吹奏楽	44	81.5%	1,347	1	2	1	8	11	6	8	7
3	茶道	38	70.4%	536	1	4	2	5	8	5	7	6
4	書道	36	66.7%	351	0	2	2	5	9	5	6	7
5	放送	31	57.4%	308	0	1	0	4	9	5	7	5
6	写真	24	44.4%	586	0	2	0	4	6	6	4	2
7	家庭	19	35.2%	310	2	3	2	3	3	2	2	2
8	演劇	19	35.2%	214	0	0	0	2	5	3	4	5
9	ボランティア	13	24.1%	205	0	3	1	1	3	3	1	1
10	華道	13	24.1%	136	0	1	1	2	4	3	2	0
11	コンピュータ	11	20.4%	147	1	1	0	1	3	2	2	1
12	文芸	11	20.4%	106	0	1	0	0	0	2	3	5
13	アニメ・漫画	10	18.5%	197	0	1	0	0	3	2	3	1
14	人権サークル	10	18.5%	44	0	0	1	2	3	2	2	0
15	調理	9	16.7%	236	0	0	0	1	2	1	2	3
16	英語	9	16.7%	101	0	2	0	1	2	0	1	3
17	合唱	9	16.7%	64	0	0	0	1	2	1	4	1
18	新聞	8	14.8%	67	0	0	0	0	3	2	2	1
19	邦楽	7	13.0%	91	0	1	0	0	1	0	0	5
20	自然科学	7	13.0%	47	0	0	0	1	1	0	2	3
設置部活動の種類（～No.20）					4	14	8	16	19	17	19	18
設置部活動の全種類					4	19	9	30	37	33	32	31

○1学年あたりの学級数別の部活動の状況

（令和4年度三重県学校体育・部活動実態調査より）



○ 伊賀地域の県立高等学校(全日制)への交通手段等
(1)通学における主な路線図



(2)通学方法別生徒数と割合(令和7年5月1日 学校基本調査より)

学校名		上野	あけぼの学園	伊賀白鳳	名張	名張青峰	合計
通学方法							
	徒歩のみ	84	2	116	54	58	314
		11.7%	0.9%	16.9%	9.3%	8.2%	10.8%
	自転車のみ	152	13	283	101	41	590
		21.3%	6.1%	41.1%	17.5%	5.8%	20.4%
	単車のみ	0	0	2	0	0	2
		0.0%	0.0%	0.3%	0.0%	0.0%	0.1%
	J Rのみ	0	30	12	0	0	42
		0.0%	14.2%	1.7%	0.0%	0.0%	1.4%
	私鉄のみ	193	0	68	158	20	439
		27.0%	0.0%	9.9%	27.3%	2.8%	15.2%
	バスのみ	58	98	33	125	164	478
		8.1%	46.2%	4.8%	21.6%	23.3%	16.5%
J Rと	私鉄	40	1	63	16	7	127
		5.6%	0.5%	9.2%	2.8%	1.0%	4.4%
	バス	0	4	7	0	1	12
		0.0%	1.9%	1.0%	0.0%	0.1%	0.4%
	自転車	2	17	4	0	0	23
		0.3%	8.0%	0.6%	0.0%	0.0%	0.8%
私鉄と	バス	47	5	10	20	330	412
		6.6%	2.4%	1.5%	3.5%	46.9%	14.2%
	自転車	29	2	9	39	29	108
		4.1%	0.9%	1.3%	6.7%	4.1%	3.7%
バスと	自転車	9	7	9	10	20	55
		1.3%	3.3%	1.3%	1.7%	2.8%	1.9%
その他 (車送迎、3つ以上の交通機関等)		101	33	72	55	34	295
		14.1%	15.6%	10.5%	9.5%	4.8%	10.2%
合計		715	212	688	578	704	2,897

令和7年度 伊賀地域高等学校活性化推進協議会 委員

No.	区分	所属	名前
1	学識経験者	三重大学大学院 地域イノベーション学研究科 准教授	加 藤 貴 也
2	有識者	上野都市ガス株式会社 取締役保安工務部長	西 垣 浩 尚
3		中外医薬生産株式会社 管理本部総務管理室 室長	上 出 優 子
4		株式会社アサネットワーク 代表	伊 集 基 之
5		オキツモ株式会社 経営管理部総務課長	加 藤 幸 司
6	関係市教育委員会 教育長	伊賀市教育委員会 教育長	澤 田 剛
7		名張市教育委員会 教育長	西 山 嘉 一
8	県立学校長代表	名張青峰高等学校 校長	水 守 智 士
9		伊賀白鳳高等学校 校長	今 高 成 則
10		名張高等学校 校長	松 崎 隆 尚
11	小中学校長代表	伊賀市小中学校長会 (伊賀市立阿山中学校 校長)	中 川 裕 晴
12		名張市小中学校長会 代表 (名張市立赤目中学校 校長)	山 本 和 弘
13	小中学校PTA 関係者	伊賀市PTA連合会 会長 (伊賀市立阿山小学校PTA)	内 田 真
14		名張市PTA連合会 会長 (名張市立つつじが丘小学校PTA)	早 川 美 恵
15	高等学校PTA 関係者	伊賀地区県立学校PTA協議会 会長 (上野高等学校PTA会長)	中 道 教 之
16		伊賀市内県立学校PTA 代表 (あけぼの学園高等学校PTA顧問)	岡 田 みどり
17		名張市内県立学校PTA 代表 (名張高等学校PTA会長)	安 藤 美 穂
18	教員代表	小中学校教員 代表 (伊賀市立上野西小学校 教諭)	福 本 真 也
19		高等学校教員 代表 (伊賀白鳳高等学校 教諭)	米 川 森 幸